

検証概要：生成AIを用いた争点整理補助の検証

AI時代における
民事司法を考える研究会

参考資料

1

参加者・目的



東京地裁、大阪地裁
の中堅裁判官6名が
参加。争点整理の補
助としての生成AI利
用の可能性について、
検証を実施。

検証方法



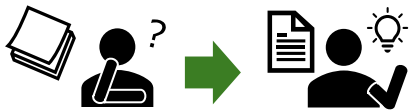
模擬記録を題材に、
争点整理の補助とし
て活用ができるか、リ
スクはあるかなどに
ついて検証・協議を
実施。

使用AIツール



Chat GPT、
Gemini、
NotebookLM
の3つの生成AIサー
ビスを使用。

利活用が考えられる場面



- ① 主張整理表や時系列表等のたたき台の作成の場面
- ② 大量の書面の要約等の場面
- ③ 引継ぎ時等における全体像の把握の場面
- ④ 文字起こしや要約の場面

課題・リスク / 対応策



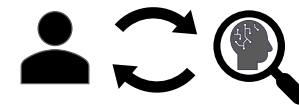
課題・リスク



- ① 抜け漏れの発生
- ② 出力の揺れ（再現性の低さ）
- ③ 期日ごとに情報が更新されていくことへの対応の弱さ
- ④ 法的理解の不十分さ
- ⑤ 出力結果過信のリスク など



対応策



AIの特性を前提に**出力結果を裁判官が確認する（ヒューマン・イン・ザ・ループ）ことが不可欠。**
必要に応じて、主張・立証内容につき当事者との認識共有も重要。
法的枠組みの設定は裁判官、AIはそれを前提とした補助という棲み分けが重要。

今後のあり方



模擬記録は、主張や証拠が整理されており、検証として不十分。確定記録など、実際の訴訟記録を用いた更なる検証が不可欠。

個人情報等を扱うための環境構築も含めて、段階的な検証が必要。